

あなたの音感は何型か？

— 「絶対音感」の誤解

ド レ ミ ド レ ミ ソ ミ レ ド レ ミ レ ?
ファ ソ ラ ファ ソ ラ ド ラ ソ ファ ソ ラ ソ

たくきよしみつ

■はじめに

……4

第一章 「絶対音感」の誤解

……6

●遠い「拒絶」の記憶

●間違いだらけの「絶対音感」

●人間音叉能力≠絶対音感なのか？

●人間音叉能力とドレミ音感は無関係

●基準点が変われば「絶対音感」の定義も変わる？

●「絶対音感」の持ち主は古楽器の演奏ができない？

●高級カセットデッキでも保証できない「元の音」

●正しく調律されたピアノは狂っている？

●純正律の天使と悪魔

●ピタゴラスコンマのジレンマ

●平均律とはすべての音が平均に狂った音律？

第二章 「相対音感」とは何か？

……28

●絶対音感と相対音感

●人間音叉的音感と音楽的才能はまったく別

●絶対音感とコンピュータ

●メロディは相対音感の産物

●小林亜星VS服部克久の盗作訴訟に思う

第三章 移動ドと固定ドの抗争

……40

●移動ドと固定ド

●クラリネットの『アマリリス』

●鈴木メソードと移動ド

●バイエル32番に潜む怪物

●固定ドvs移動ドの仁義なき戦い

●「固定ド」の罪

●音名で歌うのは無理

●階名と音名をごちゃ混ぜにする愚

●『グリーンスリーブズ』の迷宮

●12音全部に名前をつければ解決するという問題でもない

第四章 「音楽的」音感とは？

……62

●二つの絶対音感、二つの相対音感

●「実音固定ド」と「譜面固定ド」

●ミシラソと鳴ってもラミレドと聞こえる移動ド音感

●移動ド音感は鼻歌作曲派の音感

●ウグイスはドレミを知らないのに歌っている

●再生能力と創造力

●ドレミ音感が日本人の音感を殺す？

第五章 あなたの音感は何型か？

……77

●天才作曲家は固定ドだった！

●ドレミで歌えないメロディがかっこいい

●長調・短調以外の音階でも相対音感をつくのか？

第六章 デジタル時代の音楽教育

……95

●音楽の危機

●狭い居間に生ピアノの愚

●バイエルをやらせる教師は疑ってかかれ

●最初はシンプルなデジタルピアノを買う

●なにか一つは生の楽器を

●幼児期の「音感教育」は必要か？

●大切なのは「よい音楽」を聴くこと

●大人になってからでも諦めることはない

■あとがき

……109

■はじめに

ここに「絶対音感」を持っていると自称する3人の男女が集まってもらいました。

3人の前で、誰もが知っている唱歌『チューリップ』（「さいたさいた……」）のメロディを、ピアノでへ長調（Fメジャー）で弾いてみます（譜面↓）。

「これをドレミで歌ってみて」と言われた3人の男女は、それぞれ次のように答えました。

◆A君

「簡単さ、ドレミ ドレミ ソミレドレミレ……だね」

◆Bさん

「違うわ。ファソラ ファソラ ドラソファソラソ……だわ」

◆Cさん

「これをドレミで歌えですって？ 無理よ。調律が狂っているもの。このピアノ、全体のピッチが高すぎる。気持ち悪くて聴いてられないわ」

さて、この3人、誰が本当の「絶対音感」の持ち主なのでしょう。

また、絶対音感がどういうものであったとしても、その定義には関係なく、この3人の

ドレミ ドレミ ソミレドレミレ ?
ファ ソ ラ ファ ソ ラ ソ ミ ラ ソ ファ ソ ミ ラ ソ

うちで誰がいちばん「音楽的」な耳を持っているといえるのでしょうか。

さらには、世の中の大多数の人たちは、この3人のうちのどのタイプにも属さない人たち、つまりはメロディを聴いても、それを瞬時にはドレミで言えない人たちです。こうした人たちは、この3人に比べて音楽的素養が劣っているのでしょうか。

本書の第一の目的は、ちまたに溢れる「絶対音感」にまつわるさまざまな誤解、偏見、妄想、神話を検証した上で、訂正することです。

第二の目的は、私たちが身につけている「音感」にはさまざまなタイプ（音感型）があり、その「音感型」を知ること、今からでも遅くない、もっとも適した「豊かな音楽生活への耳作り」の方法を探っていくことです。

そして第三の目的は、これから音楽的な耳を養っていく小さな子供たちが、教条主義や権威主義、固定概念の犠牲者にならず、豊かで幸せな音楽教育を受けられるようにとの祈りを込めて、子供を持つ親たちに、デジタル時代に適した音楽教育を考えていただくことです。

ではさっそく、「音感」というキーワードを出発点にして、音楽という不思議な宇宙を解明する旅にかけましょう。

★この実験は、実際に <https://takukic.com/onkan/> で「音こじり」を確認いただけます。

★本書内では便宜上「F（ファ）」のよつに「固定ド」で表記している部分がありますが、固定ドを勧めているわけではありません。

第一章 「絶対音感」の誤解

——「絶対音感」などない

あるのは特定の条件のときにだけ通用する「固定音感」である

●遠い「拒絶」の記憶

「絶対音感」……それは、私にとってはとても古い記憶に属する言葉です。

物心つく頃から、私は母からこの「絶対音感」という言葉を何度も聞かされてきました。なぜなら、母はこの言葉の持つ魔力に取り憑かれ、最初の子であった私に、なにがなんでも「絶対音感」を身につけさせようとしたからです。

当時、福島市で中学校の養護教員をしていた母は、私を産んでももなく、同僚の音楽教師から「絶対音感」についての話を聞かされました。

「音楽の才能を伸ばすには音感というものが大切なんです、それはごく小さいときにしか身につけられないんですよ。いわゆる『絶対音感』は、2、3歳児のときに訓練すれば10人中9人くらいは身につくけれど、これが10歳になってからでは、10人中1人身につくかどうかなんです。だから、音感教育を受けさせるなら、早いほうがいい」

この話に大いに感化された母は、私が2歳10か月になったときに、カナダ人の音楽教師のもとに通わせ、ピアノによる音感教育を受けさせ始めました。

そのカナダ人教師はごく普通のピアノ教師で、特に音感教育のプロだったわけではありません。そこで母は、自分が読んだ音感教育に関する本をそのピアノ教師にも買い与え、こんな風に教えてほしいと要請したそうです。

本の著者のことは忘れてしまいましたが、確かだったことは「色音符」を使っていたことだということです。ドは赤、レは黄色、ミは緑、ファは橙、ソは空色、ラは紫、シは白。鍵盤に色紙を貼り付けて練習させたそうです。

……こう書いていくと、なにか上流家庭に育ったように誤解されそうですが、そんなことはありません。私が生まれた家は貧しく、トイレもない長屋でした。雪が降る中、震えながら用を足しに戸外の共同便所へ出ていった記憶があります。

もちろんピアノなどあるはずもなく、母は、私の音感教育のために、どこからか中古の足踏み式オルガンを買ってきました。当時（昭和30年代前半）、電気式のオルガンはまだ出始めたばかりで、わが家の経済力ではとても手に入りませんでした。

しかし、3歳にもならない幼児が、足踏み式オルガンを弾けるはずがありません。送風ペダルを踏みつけるだけで重労働です。椅子に座れば足がペダルに届きませんから、仕方なく、立って、力一杯ペダルを踏みながら弾こうとします。しかし、ペダルを踏むだけで精一杯なので、とても鍵盤にまで注意が向きません。手もまともに届きません。母が横に立って踏んでくれれば弾けますが、学校で一日働いて帰ってくる母も、そこまでは体力・気力がもちません。幼い私にとって、足踏み式オルガンは、悪魔のように思えたものです。それでも音感教育による効果はめざましかったようです。

散歩に行き、近くの幼稚園の庭で先生が園児たちにオルガンを弾いて聞かせている場面に遭遇すると、家に戻るなり、私は足踏みオルガンでそのメロディを弾いてみせたそうです。

しかし、順調に見えた音感教育は、1年後、突然、私の猛烈な反逆で幕を閉じてしまいました。

母の話では、ピアノ教師のところへ連れていこうとしても家の玄関の柱にしがみついて離れようとせず、引き剥がすようにして強引に連れていっても、今度はピアノの蓋にしがみつき、絶対に開かせまいとしながら泣き叫んだそうです。

カナダ人女性から音感教育を受けたときの記憶はほとんどないのですが、やめるときのその強烈な拒否反応のことは今でもぼんやりと覚えています。

なぜそんなことになったのでしょうか？

立ち上がっても鍵盤にようやく手が届くかどうかという幼児が、足踏みオルガンの演奏を強いられる肉体的苦痛から？

もちろん、そうした理由もあつたでしょうが、私には、また別の理由があつたような気がします。というのは、あのときの強烈な拒否反応には、「理不尽なものを押しつけられた不快感」に似た記憶が混じっているからです。

ピアノを習い始めて1年が過ぎた頃、それまでハ長調ばかりだった練習曲や課題に加えて、ハ長調やト長調、二長調、といった、スケールの中に黒鍵をまじえた調の曲を提示されるようになりました。そして、これは後になってから思い当たつたのですが、私の最初の音楽教師であつたカナダ人女性は、ある日を境にして、突然「固定ド」でメロディを歌い始めたような気がします。

私の強い拒否反応は、足踏み式オルガンの肉体的苦痛よりも、先生が固定ドを押しつけてきたことによる「裏切られ感」だったのではないかと思うのです。

幼児期の記憶なので、はっきりしたことは分かりません。ただ、確かなことは、1年でやめてしまったとはいえ、この後、母は誇らしげに何度も私にこう言い聞かせたことです。

「ピアノはやめてしまったけれど、絶対音感はついたのよ」

しかし、これは間違っていました。私に付いたのは「絶対音感」ではなく「相対音感」だったのです。

●間違いだらけの「絶対音感」

母親が得意げに言っていた「絶対音感」とは何でしょう。

1998年、最相葉月氏が『絶対音感』という本を出版しベストセラーになりました。恐らくそれまで、この「絶対音感」という言葉は、音楽教育界ではたびたび語られるものの、一般に浸透することはほとんどなかったと思います。